Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-06

地域振興のためのミニ独立国のいま ： 奈良県下北山村“ツチノコ共和国”の事例から

白石，太良
野崎，和生

(Citation)
兵庫地理,64:67-78

(Issue Date)
2019

(Resource Type)
journal article

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/90006043

KOBE UNIVERSITY

兵庫地理 64（2019）67-78

地域振興のためのミニ独立国のいま

―奈良県下北山村“ツチノコ共和国”の事例から―

白石　太良・野崎　和生

Ⅰ．はじめに

ここでいうミニ独立国とは、別名パロディ王国とも呼ばれるように、国家を模倣した組織のもと、遊び心とユーモアに満ちた様々な行事や物産開発を展開して地域活性化を図ろうとする活動をいう。1980年代から 90 年代前半にかけて全国各地に数多くのミニ独立国が誕生し、本稿で取り上げるツチノコ共和国（1989 年発足）もその１つであった。地域活性化のための情報誌『地域づくり』17 号(1988 年刊行)では、「いま流の地域活性化手法」として「にっぽんミニ独立国事情」を特集、「自治体も独立国の効果を認める」とまとめている[1)]。しかしその後、バブル経済の崩壊や平成の大合併による行政域の拡大などが関係して、パロディの面白さにたよるミニ独立国の大半が活動を中止、そのような活性化策が存在したことさえ知られなくなっていった。

この状況のもとツチノコ共和国では、2018 年 4～5 月にツチノコ探検 30 年回顧展を開催するとともに（ツチノコとは何かは後述する）、ミニ独立国という地域振興の方策を再び模索するシンポジュウムが開かれた。そこに基調講演者並びにパネラーとして参加した筆者は[2)]、

１．なぜ今もミニ独立国を称し続けるのか

２．なぜツチノコが地域振興のシンボルなのか

という問題に直面したのである。

ツチノコ共和国の所在地奈良県下北山村は、世界遺産熊野の大峰奥駆道が通る紀伊山地の山間地に位置していて、人口減少が著しく、基幹産業の農林業が停滞するなかで観光客誘致による地域の活性化を願う意識がいまも強く働いている。とはいえ、ミニ独立国の話題が経済的な活性化策の表舞台から姿を見せなくなったいまも、なぜミニ独立国の方式の重要性をいうのであろうか。また、ツチノコ目撃譚という民俗伝承に何を求めようとしたのか。

ツチノコ共和国の 30 年間を振り返りつつ、ミニ独立国の意味を改めて問い直してみたい。

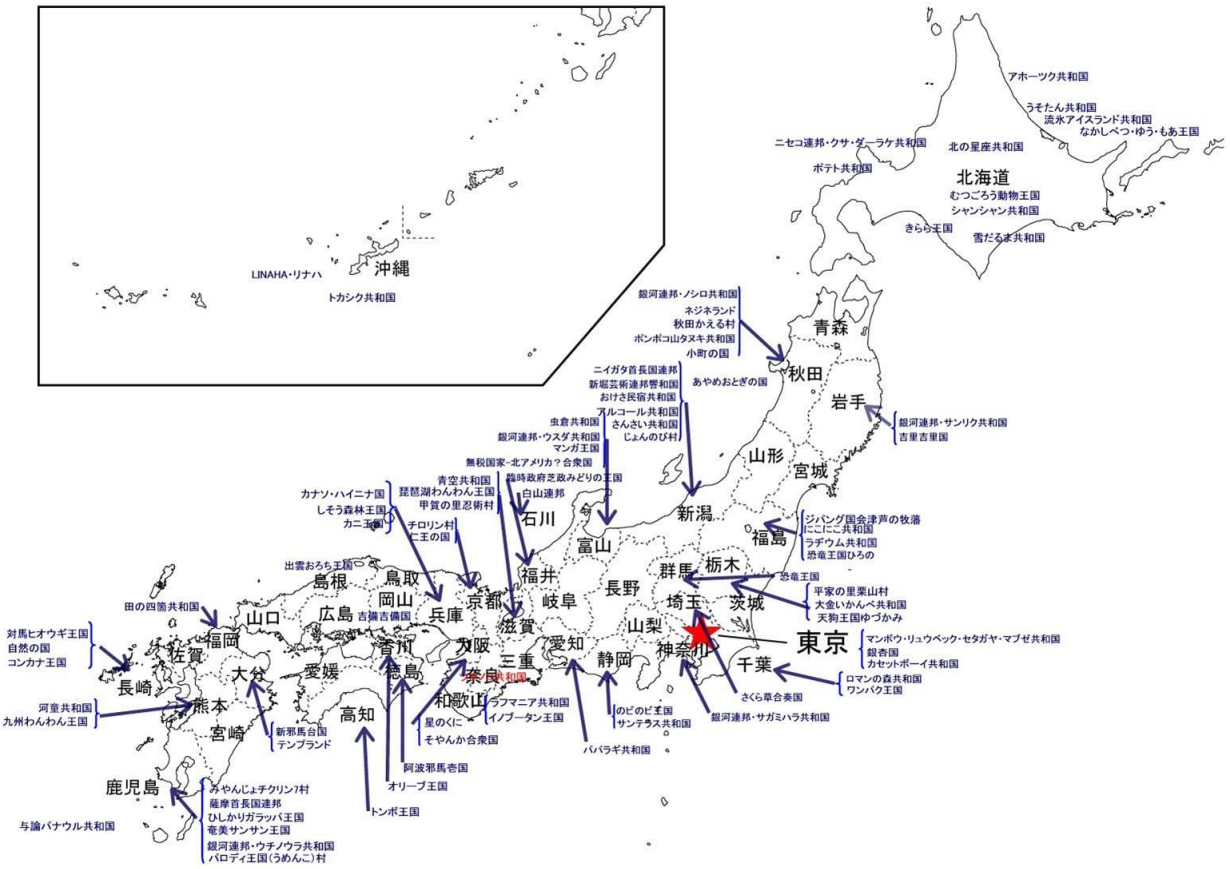
Ⅱ．ミニ独立国の盛衰

１）ミニ独立国の始まり

まずは、ミニ独立国という地域振興策の変容を簡単に整理しておきたい。ミニ独立国の考え方は、一般的には 1980 年代初めに出版された井上ひさし著の小説『吉里吉里人』に端を発するとされるが、実際には自然との調和を目指して 1972 年に発足した長崎県西海町（当時）の「自然の国」が始まりと考えられる[3)]。もっとも、ミニ独立国を地域振興の一手法ととらえ、ユーモアのある活動で地域の活性化を図ろうとしたのは 1976 年に建国された大分県宇佐市の「新邪馬台国」が最初であった。

これに触発されて 1980 年代には、北海道から沖縄まで全国に 200 以上の「国家」が誕生するブームとなり[4)]、その多くは商工会など地域の経済団体が立ち上げたものであった。白石（1988）をはじめとして筆者が各地のミニ独立国関係者から得た記録によれば、ミニ独立国発足の背景には、遊び心のある活動の話題性がパブリシティ効果を生み、その結果、観光振興や物産販売など経済的活性化につながるとの考え方があったのである。このことは、高度経済成長期からバブル期にかけての経済効率優先主義のなか切り捨てられる傾向にあった地域が、直接的かつ即効性をもって経済的活力を取り戻す話題づくりとして[5)]、それぞれの地域を「独立国」と称したものといってよい。

その後、1980 年代末から 90 年代初めになると市



第１図　ミニ独立国の分布図（1990 年ごろ）

町村が民間活力導入の手段として注目するようになり、なかには広域行政を目的にミニ独立国の連邦が組織される場合もみられた[6)]。このことは、パロディによる諸活動の効果への期待が前述の「いま流地域活性化手法」として公的に認知されたものともいえる[7)]。

２）ミニ独立国運動の衰退

ミニ独立国の活動が変化を見せるのは 1990 年代半ばからである。もっとも、活発な活動を続けるミニ独立国はすでに 1990 年ごろから減少の兆しをみせており、白石(1990)ではミニ独立国アンケート調査（1990 年実施）の発送数 203 ヵ国に対し回答を得たのは 93 ヵ国であった。この傾向はさらに深まって 1990 年代後半には国数が半減[8)]、2000 年ごろまではまだいくつかのミニ独立国が活動を継続したもののそれ以降はこれらさえ活動を休止して、面白さという宣伝効果に期待したミニ独立国の大半が消滅したと白石(2010)で報告している。

これに関連して筆者は、1990 年代初頭の各地のミニ独立国調査をまとめた白石（1991・1992）において、活発な活動を続けようとするミニ独立国には次の４つの特徴があると指摘していた。

① 自然や歴史・文化から地域らしさを示すシンボルを見出し強調している。
② なぜミニ独立国という方式なのかについての考え方が明確に示される。
③ 地域住民との連携と連帯のもとで活動が進められている。
④ 必ずしも即効性のある経済的効果のみを期待していない。

これは、ミニ独立国が郷土愛ともいうべき地域へのこだわりのもとで地域のあり様をさぐる活動であること、すなわち社会運動の一形態であるとの指摘であり、ユーモアのある活動による経済的効果のみを期待するミニ独立国は早晩なくなるであろうとの予測でもあった。このことが現実となって、先述の「いま流の地域活性化手法」とされたミニ独立国の

多くが消えていったのが 21 世紀を迎えたころだったのである[9)]。

ともあれミニ独立国活動の衰退は、もともとマスコミ報道というパブリシティ効果に期待した活動であったがゆえに、パロディ化された行事等のマンネリ化も関わって話題性が報道されなくなったことによるところが大きい。なかでも観光イベントでは、参加する観光客側もバブル崩壊の影響とか生活スタイル、ニーズの変化が関係するし、主催側にもスタッフの高齢化や後継者の不足といった問題があった。また、自治体が関与した場合には、かえって行政の立場からの振興策のなかに埋没するとか、平成の大合併に伴い地域の枠組みが変わってミニ独立国の意味を見失うことも少なくなかったのである。

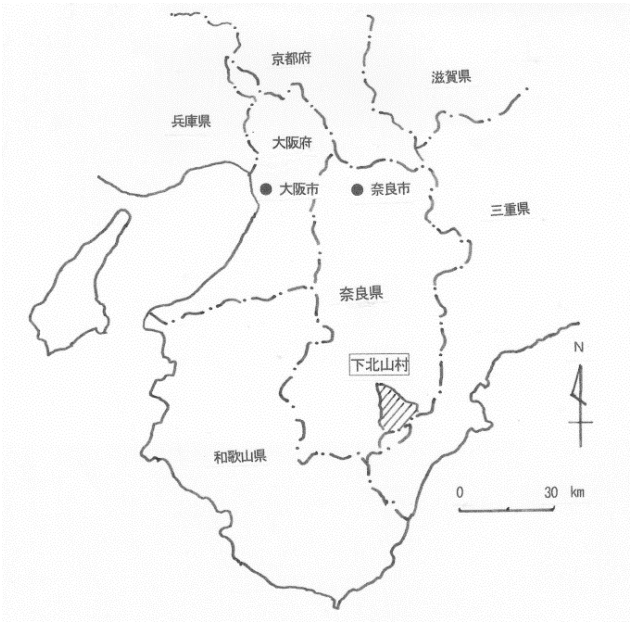
本稿で取り上げるツチノコ共和国もまた、その名を冠してのイベントは2005年前後に終えている。しかし、地域らしさの象徴としてツチノコを見出し、地域を疑似的な国家にみたてるという考え方は放棄しなかった。以下では、この間の経緯とともに、地域振興におけるミニ独立国の意味を具体例のなかで考えることにする。

なお、ミニ独立国が発足して約 40 年を経た 2018 年、管見の限りでは、活発な活動を続けるのは熊本県八代市の「河童共和国」のみではないか。もっともこの国は河童をシンボルに地域の水環境を考える活動を展開しており、経済的成果を求めた多くのミニ独立国とは一線を画している[10)]。この国については本稿では触れないが、先述した社会運動型のミニ独立国の一つといえよう。

Ⅲ．ツチノコ共和国の発足と変化

1）ツチノコとの出会い

ツチノコ共和国の舞台である下北山村は奈良県の最南部、県庁所在地の奈良市から直線距離で約 100 ㎞離れており、三重県と和歌山県に隣接して位置する[11)]。周囲を紀伊山地の山々に囲まれ、明治期の町村制施行以来の村域を維持する面積は 134 ㎢と広いものの、現在の人口はわずかに 855 人（2016 年）、ミニ独立国が発足した 30 年前に比べ半減した[12)]。



第２図　下北山村の位置

その背景は、言うまでもなく高度経済成長期以降の経済構造の変化と地域産業の衰退であるが、本村においても 1970～80 年代には基幹産業たる林業が大きな影響を受けた。そのため、新たに地域を活性化させ雇用者を生み出せる産業が模索され、この時に指向されたのが観光業であった。

観光振興に対しては、行政は観光入込みが期待される施設整備に重点をおいたが[13)]、その一方で一般村民が主体となって取り組んだのが怪獣ツチノコを探索するというイベントの開催であった。後述するように、当時はツチノコが未確認動物として広く注目されていたころでもあり、村内にも目撃者がいるとの情報が伝わるなかで、観光振興の起爆剤を模索していた共著者の野崎[14)]らが『下北山村史』民俗編[15)]に目撃譚が記載されていることを知ったのが契機であった。

＜資料１＞『下北山村史』民俗編　979～980 ページ
（抜粋・原文のまま）

これも白蛇と同様にむしろ怪異に属するものかもしれないが、見たという人が何人もある。太さのわりにうんと短いのが特徴で、上からマクレて（転がり落ちて）来るという。横槌に似ているからだろうが、池原ではツチノコ、上桑原ではノヅ

チと呼んでいる。（中略）ノヅチがノー（カリバ）に居れば、そのめぐり一帯は草が生えぬ。（中略）人に見られたら出世できぬ。これがいるとヤマヌケして、川の水と一緒に海へ出る。（中略）浦向の奥地でもほんの三・四年前、郵便局へ勤めている若い娘さんがワラビ採りに行って大きなナメクジのような､太短いぬめぬめした蛇を見たといって、真青になってW家へ飛び込んで来たことがある。（以下略）

ツチノコ伝承を如何にして発信するか、まずは住民に周知させるべく 1987 年秋の村民文化祭にツチノコ紹介コーナーを設置、目撃証言を聴く会を開催した。この活動は、下北山野生生物研究会を発足させるきっかけとなり、当時の未確認動物ブームのなかでローカル版ではあるがテレビ・新聞で報道されて広く知られることになった[16]。

＜資料２＞　ツチノコ目撃証言の例（要旨･話者名略）

例１（A氏）　1964 年 4 月。ワラビ採りの途中の道端に太く短い蛇がいた。見つめてくるので神秘的な感じがして、しゃがみこんで見つめると頭からカタツムリのような角が伸びてきた。ふと我に返ると 15 分ほどもしゃがんでいたようだ。

例２（B氏）　1977 年 7 月。話に聞くツチノコを踏んづけたときのグニュッとした感じは忘れられない。黄色い腹を見せながら１間ほど飛んで、下ばえのシダのなかに姿を消した。頭のうしろにヒレのようなものがついていた気がする。

例３（C氏）　1986 年 4 月。萱ごしにみると頭が三角形の太った蛇だったので大蛇と思って頭を叩いたら、頭を胴に隠すように身体を丸めた。出来損ないの蛇だと思ったが、あとで人に話すと「そりゃツチノコだ」といわれた。

２）ツチノコ探検からミニ独立国へ

マスコミ報道によるパブリシティ効果を好機ととらえた下北山野生生物研究会では、ツチノコを起爆剤にした観光客誘致を図ることとし、それがツチノコ探検というイベントであった。このイベントは、地域の自然の魅力を未確認動物の探索というロマンのなかで発信するのがねらいで､それが 1988 年 4 月 16･17 日に開催との報道が相次いだこともあって行政の協力も得られ、全国各地から約 150 名の参加者を得て開催された[17]。



写真１　第 1 回ツチノコ探検の風景

もとより主催者としては、探索イベントにおいてツチノコが発見されるという保証があったわけではない[18]。予想した通りツチノコの発見には至らなかったけれども、そのユニークさが報道されて反響を呼び、下北山村の知名度が急激に上昇した。

第１表　ツチノコ探検の報道数

	1987 年	1988 年	1989 年（9 月まで）
テレビ	3	19	4
新聞	4	39	37
雑誌	0	20	8
ラジオ	0	6	0
計	7	84	49

（期間がずれるのは第 1 回探検が 1988 年 4 月、第 2 回探検が 1988 年 9 月であることによる）（野崎和生まとめ）

ツチノコ探検の成功を受けて同年 9 月 23･24 日に第２回の探検イベントを実施、参加者数は半減したものの、これもまた下北山村の知名度の上昇に貢献した。とはいえ、ツチノコの探索というイベントが一過性ではないかという危惧は依然として残され

たので、イベントへの再参加を呼びかけるため、興味ある人々、俗にいうファン（現代的表現では関係人口）づくりによって関心の持続を図る必要があったのである。

そこで指向されたのが、当時盛んな活動が広く報じられていた地域活性化策のミニ独立国で、下北山野生生物研究会では下北山村の広がりを疑似的な国家と見立てて、1989 年 4 月に「ツチノコ共和国」の名乗りをあげたのである[19]。もちろんツチノコ共和国はパロディ風の面白さが売り物のミニ独立国であったから、関係者や関連場所にユニークな名称をつけるなど、遊び心が随所に取り入れていることはいうまでもない[20]。

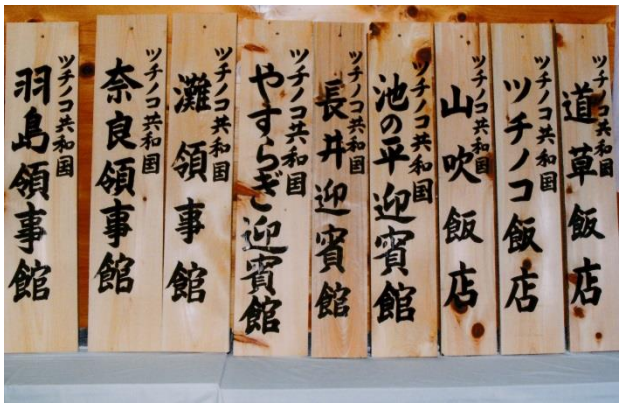


写真２　ユニークな施設名称

（ツチノコ共和国ファンの店舗や自宅に付けてもらった）

３）ツチノコ共和国の状況

１．ミニ独立国としての活動

ミニ独立国の発足後の活動はどうであったか。ツチノコ探索のイベントは継続されたが、回を経ても見つからないのはもともと存在しないのではとの声もあって参加者は次第に減少、マスコミ報道への露出度も減って 1990 年を最後に開催されなくなった。

しかし、ツチノコをシンボルにミニ独立国方式で地域振興を図る考え方に変化はなく、1989 年には、当時同じくツチノコ探索を行っていた岐阜県東白川村や広島県旧上下町（現府中市）などと仮称ツチノコ連邦というミニ独立国の連携組織を模索したことがある[21]。この試みは実現しなかったが、地域振興の長期的展望からは国家に擬せられる地域的まとまり相互の連携が必要との判断があったことになる。その一方で、1992 年には通称後進国サミットと称する全国のミニ独立国交流会の主催団体となり、各地から 10 余りのミニ独立国が下北山村に集まって情報交換をしている。

ツチノコ探索に代わるイベントとしては、1989 年に始まる蛍狩りなど、ツチノコの棲息を思わせる山野を舞台としたいくつもの活動がツチノコ共和国の主催で行われた。突進鍋の集い、ネイチャーゲーム、森の音楽祭、コウモリフェスタ、炭焼き体験などがそれで、どこにでもあるような自然と産物に脚色を加えたイベントであった[22]。これらはいずれもツチノコの探索にこだわらずに山林や暮らしの全体を楽しむ活動であり、ミニ独立国という表現で地域を面的広がりのある場所ととらえたことから発想された活動といえよう。交通の不便さもあってそれぞれのイベントの入込客数は多くないが、いずれも地域の自然そのものが観光資源であるとの主張がみられるイベントであった。

２．イベント型からの脱皮

しかし、これらの行事の多くも 2000 年代に入って順次終了し、ツチノコ探索も再び実施されなかった。2005 年以降は、ミニ独立国という考え方を残しつつも、具体的なイベントの実施は休止状態になった。その要因について観光振興に焦点を当ててツチノコ共和国をまとめた白石・野崎（2009）においては、自然環境に頼るイベントにおける自然災害の影響[23]、中核メンバーの固定化と高齢化に伴う後継者難、メンバーの負担に依存する経費問題、観光客の入込みを生活破壊とみる住民意識をあげてい



写真３　ミニ独立国サミットの風景

る。

2010 年ごろからのツチノコ共和国は、イベントの実施がなくなるにつれて村外から継続的に訪れるファン（国民と呼ぶ）は減少したが[24]、イベントに頼らない活動を目指して地域情報の発信に重点を置くようになった。その背景には、上の要因にもある受け入れ側の人的・経済的負担の大きさが関わっており、歳月とともに中核メンバーが減少したこともある。これを乗り越えるには、地域振興を量的拡大に求めるのではなく、少人数でも取り組めるような質的充実に置く姿勢へ転換させる必要があったが、試行錯誤を繰り返しつつも特段の解答が得られたわけではなかった。

この流れのなかで、2018 年春に開催されたツチノコ大探検隊 30 年回顧展とシンポジュウムは、ツチノコという名称のもつ意味と、ミニ独立国を名乗り続ける理由について接近する手がかりを与えてくれたのである。

そこで、過疎化する山間地の地域振興に際して、ツチノコはどのように取り上げられたかを考えてみたい。

Ⅳ．地域振興とツチノコ

１）ツチノコの観光資源化

１．妖怪から未確認動物へ

ツチノコは「槌の子」と書き[25]、北海道と南西諸島を除く日本各地に目撃譚が残る胴の太い蛇とされている。その存在は古代から知られていたようで、古事記でもノヅチと呼んで野の神カヤノヒメ（萱の姫）の別名とされたが[26]、伊藤(2008)によれば、その目撃譚が数多く残されるのは江戸時代からであるという[27]。そこで語られるツチノコは頭だけの蛇のような形をしており、毒をもっていて、人を襲うというものであった。そのため、ツチノコは蛇の妖怪と考えられ、人に祟りをもたらせるなど忌避される存在であった。

妖怪ツチノコは[28]、バチヘビ、ツチヘビなど各地で様々な名前で呼ばれたが、1960～70 年代の高度経済成長期のころから広く人びとの注目を浴び始める。ツチノコに遭遇した随筆家が各地のツチノコ捜しを始めたことがきっかけとなり[29]、それがマスコミを通して人びとに伝えられて[30]、日本にも居る未確認動物として広く知られるようになったのである。当時は経済発展に伴って楽しさとか心の豊かさを人びとが求めた時代であり、ネッシーや雪男など未知の動物へのロマンが広がっていたことが背景にあったと考えられる[31]。

さらにツチノコは、このころに人気漫画『ドラえもん』などの漫画文化にも取り上げられ、子供を含む多くの人びとの妖怪や怪獣への好奇心を満足させたのである[32]。ただしそこで描かれるツチノコは、かつての忌避される妖怪としてではなく、出会えば怖さもあるが姿や形は可愛らしい未確認の小動物であった。

２．ツチノコの探索

このような妖怪から未確認動物へのツチノコのイメージの変化のなか、それを地域振興ことに観光振興のキーワードにする活動が始まったのは 1980 年代後半からである。経済成長から取り残された山間地が集客力のある観光イベントの開催を企画するに当たり、未確認動物ツチノコの目撃譚が我が地域にもあることに注目して話題性を高めようとしたのがきっかけであった。それを探すイベントは、宝探し的ロマンを秘めているとともに未確認動物の第１発見者になる喜びのあるプログラムと考えられたのである。

かくしてツチノコは、各地に残る民俗事象としての妖怪から、現実世界の観光資源の一つへと変化した。このうち管見の範囲内ではあるが、ツチノコ探索のイベントを実施した市町村は次のようになる。なお、ツチノコ探索は、1989 年が巳年であることに因んで、その前後に各地で行われた。

新潟県糸魚川市（イベント開始は 2006 年）☆
岐阜県東白川村　☆
京都府瑞穂町（現京丹波町）
兵庫県美方町（現香美町）
兵庫県千種町（現宍粟市）
奈良県下北山村

和歌山県すさみ町
岡山県吉井町（現赤磐市）
広島県上下町（現府中市）
大分県直入町（現竹田市）
（注）探索イベント実施時の市町村名による。
☆印は2018年現在探索イベント継続中。

これらの市町村のツチノコ探索は、いずれも「最近目撃された」との情報が得られたことに基づいて開催され[33]、発見者に賞金（賞品）を出すしかけを加えたこともあって[34]、人びとに関心を持って受け入れられた。とはいえ、広い範囲を探し回るという探索型イベントは運営面の困難さがあり、町村合併に伴いイベント開催への見直しが行われる場合もあるなど、それぞれの地域の事情が関係してその多くが回を重ねることはなかった。

3．東白川村の探索イベント

ツチノコの探索を実施した市町村のうち、30年間にわたりそのイベントを続けている岐阜県東白川村について簡単にふれておく。

東白川村は県の東部、県都岐阜市の北東約60㎞に位置する山間村落で[35]、ツチノコの目撃譚が数多く残される村として知られる。桂川（2015）によれば、1959年にも亡骸発見の情報が寄せられ、それを受けて、1989年には亡骸がご神体であるとする槌の子神社が創建されたという[36]。ツチノコによる活性化策はふるさと創生事業の助成金をもとに観光拠点施設「つちのこ館」[37]（東白川村では施設・行事に平仮名表記を用いる）を建設したことに始まる。なお、この村の人口は、ツチノコによる地域活性化を始めたころが約3,300人（1990年）、現在は約2,100人（2018年）である。

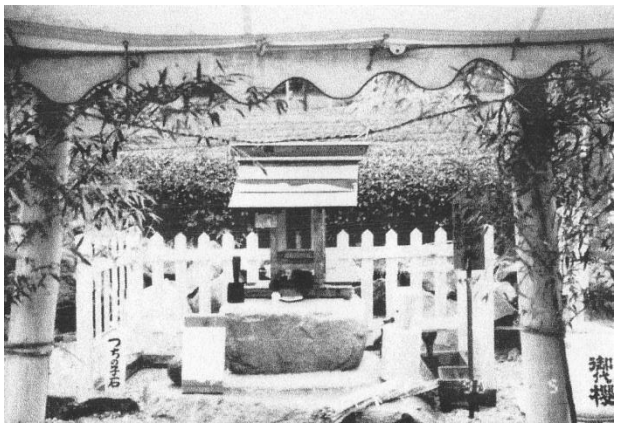


写真４　東白川村の槌の子神社（桂川真郷氏提供）

同村のツチノコ探索イベントは「つちのこフェスタ」と呼ばれ、その第1回は1989年に開催、その後も毎年継続して2018年には第30回を迎えた[38]。この点では開始後数年で休止になった下北山村と異なるが、その特徴はツチノコ探索といいつつも自然散策に重点をおくイベント、地場産品である茶畑内などを巡る健康ウオーキング的なイベントであったところにある。いわば豊かで明るい自然のなかで宝探しゲーム的雰囲気のもとで行われる観光イベントであり、ツチノコはその宣伝手段としてこの地に棲息するはずの可愛い未確認動物であることが求められたのである。

そのため、東白川村ではツチノコを探す場所とかその雰囲気は重要な意味をもつことになり、下北山村のように人々の暮らしの場を含めて全村をミニ独立国と見立てる方向性は取られなかった。

2）地域のシンボルとしてのツチノコ

1．地域振興における自然

それにしても、地域振興において何ゆえにツチノコが取り上げられたのか。言うまでもなく地域振興では、物産開発であれ観光振興であっても、自らの地域の素晴らしさを自己主張して他の地域との差別化を図る施策が必要である。自己主張することがらは自然や歴史・文化、科学・芸術など多岐に及ぶが、過疎化の進む山間地では自然の素晴らしさを主張する場合が多い。しかし、ごく普通の山間地の自然に大きな違いがあるわけではないから、そこが未確認動物である怪獣ツチノコの棲息を予感させる自然であれば、差別化された自然としての情報発信ができることになる。

この点に関して、ツチノコ探索イベントを実施した先述の各市町村は、いずれもその地の自然の素晴らしさを幻の怪獣ツチノコが目撃された自然に託したものであった。ことに東白川村のツチノコは、可愛い未確認動物というイメージを保ち続け、人の暮らしとは切り離された穏やかで美しい自然、いわば

消費する自然のシンボルとしてツチノコを振興策の中心に置いたのである。それ故に、東白川村では全村公園化構想のもとで心地よい自然を活かす地域振興が進められた[39]。

これに対し下北山村では、当初はツチノコを未確認動物とみた探索に始まったが、その限界に気づき、食を含めた地域の暮らしを体感するイベントへと変えていった。さらにその過程でイベントの舞台が災害で大きな打撃を受け、自然にはツチノコの棲息を予感させてくれる森林とその周辺の田畑が含まれること、すなわち自然は美しいだけでなく怖さもあるという日本人の伝統的自然観を思い起こさせた。しかも、このような場所に抱かれて人びとの日々の営みが行われるのであるから、地域振興に際して考えるべき自然は、まさに森羅万象としてとらえる必要があると意識するようになったのである[40]。

２．心象風景としてのツチノコ

地域振興における自然をこのようにとらえてみると、ツチノコの目撃譚は「ツチノコを見た」というよりも「見たように思った」ということの記録、言い換えればツチノコが居る心象風景の記録であると考えることになる。したがって、ツチノコをキーワードにする振興策は、ツチノコの棲息を予感させる場所とそれに抱かれた生活文化を含め、地域全体の魅力を発信する施策であることが求められる。これは、ツチノコが単に自然のシンボルというのではなく、人の暮らしを含む地域という広がりのシンボルであると考えることを意味する。このようなツチノコのとらえ方は、ツチノコが未確認動物ではなく、地域に居ついているであろうが目にはみえない「何か」といった一種の妖怪とみる意識への回帰でもあると言えるかもしれない。

妖怪を地域振興につなげた例としては岩手県遠野市や鳥取県境港市が知られるが[41]、いずれも現実世界に妖怪は存在しないと知りつつも、その存在を思わせる場所の雰囲気が醸し出す魅力を利用して地域活性化を目指している。山間地の下北山村をそれらと単純に並べて比べることはできないけれども、ツチノコを「居るように感じられる」妖怪と考えて地域振興を進めようとしたのは同じである。

Ⅴ．ミニ独立国の役割

１）生活空間の範囲

上にあげたようなツチノコを妖怪とみる地域振興では、ツチノコとともにある広がりをどのようにとらえるかが重要である。なぜなら、ツチノコは未確認動物として探索される対象ではないので、目撃譚の残る場所など棲息地と推定されるところに焦点を当てるだけでは十分ではないからである。そこで下北山村では、先に述べた通り、心象風景としてツチノコを感じるような広がり、すなわち自然と暮らしが一体化した生活空間こそが振興策で対象とする範囲と考えるようになった。

ここに、ツチノコ探索の話題性継続を願って始まったツチノコ共和国というミニ独立国でありながら、探索などのイベントを実施しなくなってからも、山間地の地域らしさ（アイデンティティと言ってもよい）を自己主張する範囲であると表現するために、ミニ独立国の看板を下ろさなかった理由がある。

言うまでもなく国家は、領土という広がりのもと、自然と歴史、文化を共有する国民が暮らし、外に対しては独自性を内には一体性を主張する地域単元である。したがって擬似的な国家としてのミニ独立国は、一定の広がりのなかに自然と歴史があり、住民が営みを行なうとともに喜びを共有してともに暮らすところ、言い換えれば、自らの暮らす舞台を総体的・総合的に表現した広がりということになる。

このように地域を擬似国家と見立てる立場は、地域振興においては具体的な活性化施策の前提ともいうべき地域全体をみつめるまなざしが大切ではないのか、換言すれば生活空間としてのまとまりの確認が必要ではないかということの指摘である。もとよりそれは、俗にいう地域に対するコンセプト（概念あるいは考え方の意）であるから、直接的また短期的な経済効果をもたらせようとする施策そのもので

はない。しかし、パロディ風の面白さに依存したミニ独立国の多くが活動を中止したのは、先述のいくつかの参考文献にも記される通り、自らの地域のコンセプトへの理解が不十分なまま、あるいはそれと乖離し、時には地域の一画の特徴のみを強調してイベントなどを行ったところにあった。

2）社会運動としてのツチノコ共和国

この見方からツチノコ共和国についてみてみると、過疎化や産業の衰退などで暮らしそれ自体の存続が可能かという問題に直面しているからこそ、個別のイベントの背後にある地域の総体的・総合的特性を「ミニチュアながらわが村は独立国」とユーモアを込めた主張がなければ、具体的な施策も長続きしないと考えたことになる。これを言い換えれば、ミニ独立国として自己主張することが他の地域との差別化ができる地域振興の根幹との判断であった。もちろんこれは地域振興のための考え方なのでそれ自体は活性化のための施策ではないから、活動内容とその効果を量的にかつ期間を区切って目に見える形で示すことはできない。このことがかつて話題を呼んだころのミニ独立国の活動との相違であり、先にもあげた社会運動としてのミニ独立国へとツチノコ共和国が変化していった表れであった[42]。

とはいえ、過疎化の著しい山間地にある下北山村としては、長期的にはこの考え方のもとで進められる諸施策こそが地域の存続に結びついた活動（地域づくり活動と呼んだ方が良いかもしれない）であると思われる。なぜなら、地域振興の目的は経済的活性化だけではなく、心の喜びを含めた暮らしの維持と充実を目指すところにあるからである。そのためには暮らしの舞台である地域といかに向き合うかといった姿勢が重要であり、これを示す意味でこの地の自然と歴史のシンボルであるツチノコの名を冠して地域を主張したのである。

ただし、遊び心からとはいえ「わが村は独立国」などといえば、経済的にも自立した地域ととらえられる恐れもある。もちろん結果としての経済的自立を願わないわけではないが、重要なのはその前提となる住民の地域に対する意識のあり方であった。ここにも、イベント参加者という地域外からの入込客に期待したかつてのツチノコ共和国と、地域住民の意識にねらいを定めるいまのツチノコ共和国との相違がある。

現在のツチノコ共和国のコンセプトは、住民の一部が中心となって志向している状況にとどまっている。当然のことながら、行政関係者や多数住民に認知され、その協力のもとで何らかの施策を推進するなどには至っていないのである[43]。ここにも、かつてのツチノコ探索のような目に見える賑わいづくり活動との相違があるが、新たな展開をみせるツチノコ共和国はイベント主催団体ではないので、これもやむを得ないところもある。むしろ重要なことは、ミニ独立国というとらえ方でこれからの下北山村のあり様を考えるという、人びとの意識改革へ向けた活動こそがツチノコ共和国の果たすべき役割であると言えなくもない。

ミニ独立国というのは、地域の将来に向けた社会運動であると同時に、過疎山村にとっては地域の存続のための社会運動であり、そこには社会教育の側面も含まれた活動でもあることをツチノコ共和国の変容から知ることができる。

Ⅵ. まとめにかえて

1980 年代にユーモアのある活動で地域の振興を図ろうとしたミニ独立国は、30 年を経た現在、その多くが活動の表舞台に姿をみせなくなった。そのなかにあってツチノコ共和国は、改めてなぜ独立国と称したのかを問いかけ、自らが暮らす地域とは何かを追い求めている。そこから出てきたのは、地域振興に対する経済的効果から文化的・社会的効果への転換であり、従来のイベント型活動からの脱皮であった。

基幹産業の衰退と過疎化の著しい山間地の暮らしに経済基盤が必要なことはいうまでもないが、それのみで住んで良かった、関わっていて良かったと思える地域となるわけではない。重要なのは、そこで暮らす人びとや関わる人びとが「自分たちの地域が

ここに存在する」というような、心の豊かさと喜びを実感できる地域であり続けることではないか。そのためには、「この地がどんなところか」を知るとともにそれを人びとが共有することが求められ、これをなくしての地域振興策、すなわちどこにでもあるような活動をするだけでは、時代の流れに埋没してしまうことになる。

ここにおいてツチノコ共和国は、パロディ化された部分はなくなったけれども、根底に地域という暮らしの舞台の存在を意識し、民俗伝承に由来するツチノコを地域らしさ（アイデンティティ）のシンボルにして、「吾、ここにあり」と主張するためミニ独立国を名乗り続けて情報の発信を継続してきた。このようなツチノコ共和国の社会運動への変容は、すべてのミニ独立国に当てはめることはできないまでも、地域を擬似的な国家と見立てるミニ独立国のいまの形ではないかと考える。

現在では、ミニ独立国そのものが忘れられた存在になりつつあるけれども、地域らしさを失わせつつあるいまの時代だからこそ、「地域は擬似的な国家」ととらえて自分たちの地域の自己存在を確認することが求められている。

本稿は、地域振興におけるミニ独立国のいまをツチノコ共和国の事例を中心に考えるのがねらいの研究ノートである。そのため本稿では、事実の記録とそこからみえるミニ独立国のあり様に関して、筆者の見解を含めながら整理する形でまとめている。これを一言で表現するならば、ミニ独立国とはパロディの面白さからくる話題性を求める活動ではなく、「国家」と称することにこそ意義のある活動であるということになる。

付記

ミニ独立国方式による観光振興の現状に関しては、日本観光学会第 112 回全国研究大会（2018 年 11 月 17 日、於：南山大学）において口頭発表をした。本稿は、そのうちツチノコ共和国の事例をもとに、ミニ独立国がどのような方向性を持とうとしているのか中心にまとめたものである。

本稿をまとめるにあたっては、資料収集と聞き取りにおいて下北山村と東白川村の関係部局ならびに多数の住民のご協力を得た。また、民俗学の立場でツチノコ伝承を追求される台湾・南台科技大学助理教授伊藤龍平氏のご指導を頂いた。すべての方々のお名前を記すことはできないが、心より厚く御礼を申し上げます。

注

1) 『地域づくり』は（財）地域活性化センターの発行の情報誌である。特集「ミニ独立国事情」には、「逆説的にいえば、閉国されたときにはじめて建国の意義が生かされる。これはミニ独立国が地域として自立することでもある」との筆者（白石）のコメントが載せられている。しかし、現実には、多くのミニ独立国が地域の自立を見る前に閉国された。

2) 野崎和生は基調講演者、白石太良はパネラーである。

3) 「自然の国」は自給自足など自然と人間の調和を目指して暮らす人びとの集団であり、地域振興型のミニ独立国ではなかった。（三省堂編『にっぽん『独立国』事典』、三省堂、1985 年、pp. 196–201）

4) 西日本新聞社の調査による「ミニ独立国一覧」（1989 年 2 月）には、全国で 203 ヵ国のミニ独立国が記載されている。

5) 報道される話題づくりとしては、ミニ独立国サミットと称する全国交流会のほか、オリンピック、万国博などと呼ぶユニークな全国規模イベントを活発に開催した。1987 年には世界最小の国家バチカン市国を訪問し、法皇ヨハネ・パウロ二世に謁見するなどの国際交流活動も行った。

6) 現職の首長がパロディ国家の国王に名を連ねるなど、ミニ独立国を自治体の地域活性化部門ととらえる場合が多く、秋田県では、67 の全市町村にミニ独立国を誕生させた。広域行政では、隣接市町村をそれぞれ国家に見立てて連邦制を名乗り、広域観光の振興を図るなどがある。

7) 前掲 1）

8) 1997 年の通称ミニ独立国サミット（全国交流集会）の開催案内は、当時確認されていたミニ独立国 101 に案内状を発送、回答数は 36 であったという。主催団体のミニ独立国「チロリン村」（京都府宮津市）の関係者談。

9) 地域の集客イベント開催時に主催団体としてミ

ニ独立国を称するとか、企業活動のなかで国名を冠するなどミニ独立国が残るとみえる場合もあるが、これをミニ独立国活動が継続しているとみてよいかどうか判断は難しい。

10) 河童共和国編『河童のクロニクル・河童共和国30年史』、河童共和国、2017年

11) 2018年現在、下北山村の公共交通機関は近くの中心的な町と結ぶバスが一日一便あるのみで、移動手段は自家用車に頼らざるを得ない状況にある。

12) 1990年の人口は約1,500人であった。

13) 村の観光振興の中心になった下北山スポーツ公園は1965年に完成した池原ダム（発電用）の堰堤下に造られ、サッカー・テニス・ゴルフなどができる合宿型施設である。スポーツ公園に近接して日帰り温泉施設“きなりの湯”がある。

14) 本稿の共著者である野崎和生は、当時Uターンして故郷に戻り、地域活性化を公約に村会議員を務めていた。

15) 木村博一編著『下北山村史』、下北山村役場、1973年、pp. 979-980。

16) ＮＨＫテレビで放映されたほか、地方紙の吉野熊野新聞には二度にわたり目撃証言とともに記事が掲載された。

17) 新聞報道では四大全国紙が取り上げたほか、週刊誌報道の影響も大きかった。行政としても、民間団体の主催ではあるが観光担当課を問い合わせ窓口にする、ツチノコ捕獲時の賞金（生け捕り100万円など）の支出を検討するなどの協力をした。

18) だからこそ主催者は、ツチノコを探すという行動だけでなく、参加者に対して探索前後のしかけ、例えば地場産品での食事とか土産物などにはより一層の留意をした。もてなしのため沢蟹二百匹を捕獲したというエピソードもある。

19) ツチノコは蛇に似た怪獣と考えられており、1989年が干支でいう巳年に当たることから、ミニ独立国の誕生がさらなる話題性を呼ぶことになる。

20) 活動の中核を担う集まりを愚人会議といい、役職名を爽里大臣や大喰大臣等の当て字で書くなどで遊び心を表した。年会費（1,000円）を税金と呼び、その納入者を国民ととらえてパスポートと呼ぶ案内冊子を配布、彼らが村外の居住者であれば出稼ぎ中と称した。そのうちイベントへの複数回参加者を領事と呼び、看板としてまな板サイズの檜板の配布も行っている。

21) 岐阜県東白川村はツチノコ目撃譚が多く残され、1989年から年一回のツチノコ探索イベントが30年間続いている。広島県旧上下町の場合は、府中市への町村合併に伴いイベントが中止になったようである。

22) 蛍狩り（1989～2004年）は源氏蛍と平家蛍の棲息を源平合戦ととらえ、琵琶の演奏を加えたイベントであった。突進鍋（1991～2004年）は猪肉のすき焼きのパロディ風ネーミングである。ほかにも、トンボ観察会、夫婦で桜を植える会、ジャズコンサート、ツールド熊野の後援なども行っている。開催は1990年代に集中し、1回限りのものもあるが、数年間継続したものが多い。

23) ことに2004年8月の台風11号による被害により蛍やコウモリの棲息地などイベントの対象地が壊滅状態になったことが大きい。

24) 村外に居住する国民の数は約350名と把握されているが、国税と呼ぶ年会費納入者は、2018年現在10数名程度に減少した。

25) 槌の子という語は、丸くて太い胴体の形状が木槌に似ていることによる。

26) 古代語ではツ＝の、チ＝霊なので、ノヅチは野の霊となる。

27)「和漢三才図絵」（1712年）では野槌蛇の名称で記され、「信濃奇勝録」（1886年）に挿入された野槌の絵がその後のツチノコのイメージをつくりあげたようである。

28) 近畿地方における名称のツチノコが一般化したのは1970年代ごろからのようである。

29) この随筆家は釣り人として知られる山本素石（1919～1988）。ツチノコとの遭遇は1959年というが、1960年代後半からのツチノコブームの火付け役とされる。釣り人仲間と行った探求の顛末は『逃げろツチノコ』（二見書房、1973年）として刊行。

30) ツチノコ探索に情熱を燃やす山本素石をモデルにした小説『すべってころんで』（田辺聖子著、1972年朝日新聞連載）が評判を呼んだ。

31) 当時はアポロ計画による月面探査が宇宙人は存在するのかという興味とも重なって話題を呼び、地球上の未確認動物への関心が高まった時代であった。

32) 自らツチノコを目撃したという矢口高雄の漫画『幻の怪蛇バチヘビ』が「週刊少年マガジン」に掲載されたのは1973年、藤子・F・不二雄『ドラえもん』の「ツチノコさがそう」は1974年の「小学五年生」、「ツチノコ見つけた」は1975年の「小学六年生」である。水木しげる『妖怪なんでも入門』（1974年）でもツチノコが取り上げられている。

33) ツチノコ探索イベントを実施した市町村の相互の関連性を知るのは難しい。しかし、奈良県下北山村のツチノコ探索の報道に誘発され、自らの地域にある目撃情報を活かすため実施された場合もあったのではないか。本稿の共著者である野崎とその仲間は、ツチノコ探索という活性化手法に関連して、岐阜県東白川村、京都府旧瑞穂町、兵庫

県旧美方町、兵庫県旧千種町、和歌山県すさみ町、岡山県旧吉井町、広島県旧上下町の７ヵ所に招聘された。

[34] 賞金額は 100 万円の場合が多いが、なかには２億円とか別荘地の提供などもあった。

[35] 東白川村は合掌造りで知られる白川郷とは別の村落である。

[36] ツチノコの亡骸埋葬地の変色した土をご神体と見立てた。槌の子神社は一種の観光スポットであるが、創建後 30 年を経た現在も毎年の祭礼を続けて村の年中行事の一つになっている。

[37] ふるさと創生事業で交付された１億円の一部を利用して「つちのこ館」と呼ぶ物産販売施設を建設、ツチノコ関連資料を展示する「つちのこ資料館」を付設した。この施設は村の観光拠点といえる。

[38] 毎回 2,000 人ほどの参加者があるという。2018 年は悪天候により中止。

[39] 東白川村は日本で最も美しい村連合に加盟している。この団体は 2005 年に設立され、美しい景観に配慮したまちづくりを行うことに重点をおく。2017 年現在、全国の 63 町村・地域が加盟。

[40] 森羅万象はありとあらゆるものの意である。日本人の自然観では、自然は人間を取り巻く環境という意味ではなく、人間を含めたすべてを構成要素としている。

[41] 遠野市では河童や座敷わらしなどの民俗伝承、境港市では妖怪漫画に基づく振興策である。いずれも現実には存在しないと知りつつも、「いるかもしれない」という心象風景を地域振興につなげている。

[42] これをツチノコ共和国がパロディ王国を脱したともいえようが、ツチノコ共和国はもともとお遊び的要素が少なくパロディ王国の語は当てはまらない。

[43] 例えばＮＰＯ法人化して具体的な施策を行うとか、行政と連携して活動を推進するなどには至っていない。

文献

伊藤龍平（2008）:『ツチノコの民俗学』，青弓社.

桂川眞郷（2015）:『回想つちのこ村』，私家本（著者は元東白川村村長）.

白石太良（1988）：鹿児島県のミニ独立国，兵庫地理 32，pp. 52-64 ．

白石太良（1990）：ミニ独立国運動による地域づくりの現況―アンケート調査の整理を中心に―，流通科学大学論集―人文・自然編３－１，pp. 93-116 ．

白石太良（1991）：地域づくり型ミニ独立国運動の変容，流通科学大学論集―人文・自然編４－１，pp. 19-30.

白石太良（1992）：地域づくり型ミニ独立国運動の変容（Ⅱ），流通科学大学論集―人文・自然編５－１，pp. 1-10.

白石太良（1999）：ミニ独立国運動の変化と方向性，学校法人中内学園理事長中内㓛喜寿記念論集，pp. 105-116.

白石太良（2010）：地域づくり型ミニ独立国のいま―４つの事例から―，流通科学大学論集―人文・自然編 22－２，pp. 111-124.

白石太良・野崎和生（2009）：ミニ独立国運動と観光振興―ツチノコ共和国を事例に―，日本観光学会誌 50，112－117.

（しらいし　たろう　流通科学大学名誉教授）

（のざき　かずお　元下北山村村会議員・ツチノコ共和国代表）